

2025.10.6

企業版ふるさと納税第46回分科会

官民共創による まちづくりへの挑戦

～ 前橋国際芸術祭2026 ～

群馬県前橋市
広報ブランド戦略課

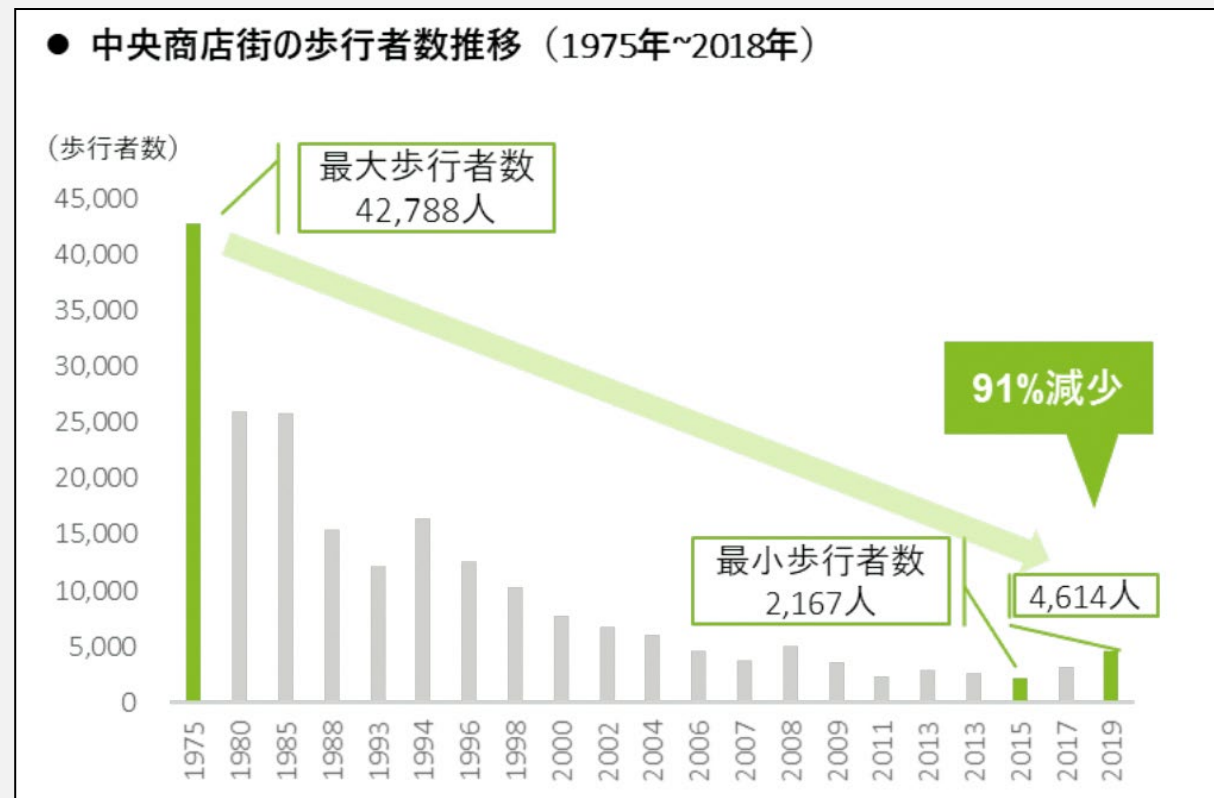




6月7日 石破総理(当時)



8月30日 伊藤地方創生担当大臣(当時)



内閣府「SIBによる前橋市アーバンデザイン推進業務統括的評価報告書」より

中心商店街の歩行者数の減が顕著

前橋駅から中心商店街まで徒歩20分の微妙な距離

車社会による郊外店舗への人の流出

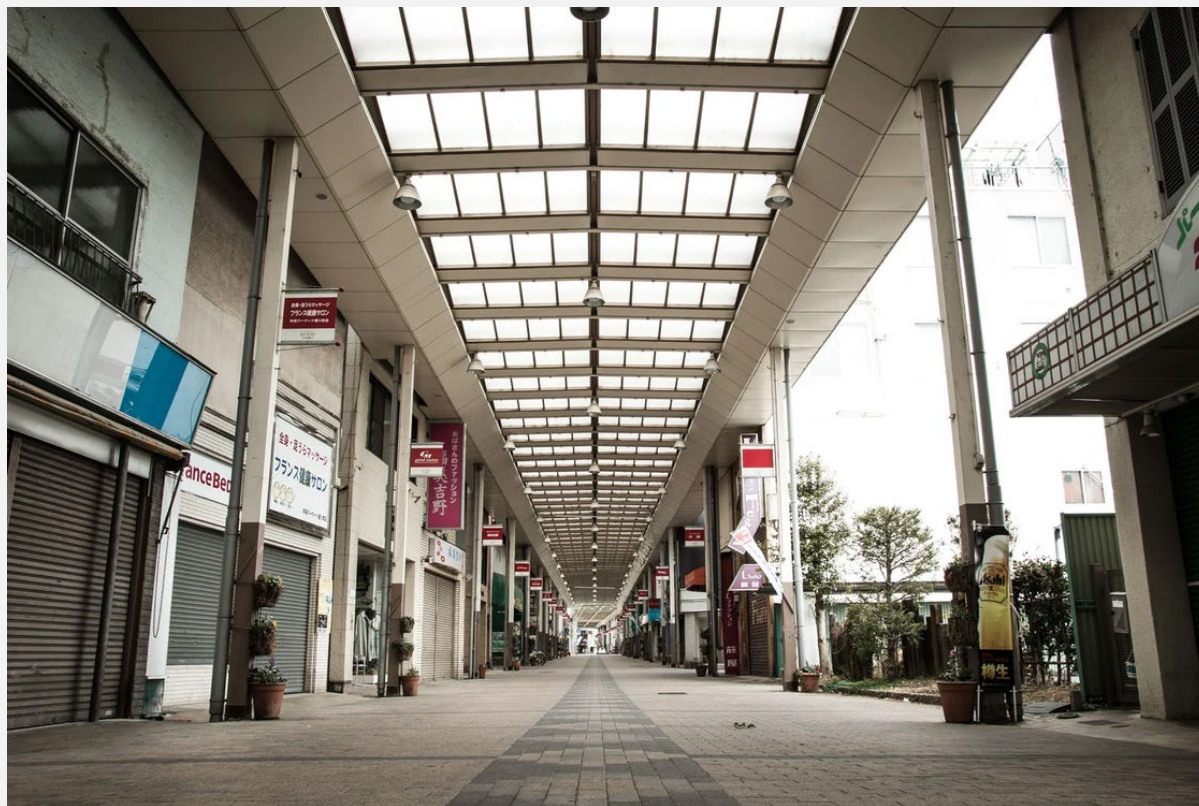
バスなどの公共交通の利便性が低い

空き店舗を象徴するまちへ

世代交代もあり、空き店舗が増加

空き店舗が空き店舗を生む状況

教科書にシャッター街の写真が掲載



背景 | 「前橋ビジョン」策定が官民共創の契機に

3

2016年

前橋ビジョン めぶく。 策定

民間の視点から市の特徴を調査・分析し、「前橋市はどのようなまちを目指すのか。」将来像を示す、まちづくりに関するビジョン。外部の視点で分析してもらうため、(一財)田中仁財団がドイツのコンサルティング会社「KMS TEAM」に依頼し、本市について「Where good things grow（良いものが育つまち）」という分析がなされた。この英文による分析を本市出身の糸井重里さんが、日本語で「めぶく。」と表現した。

市内企業・経営者が支えるしくみ



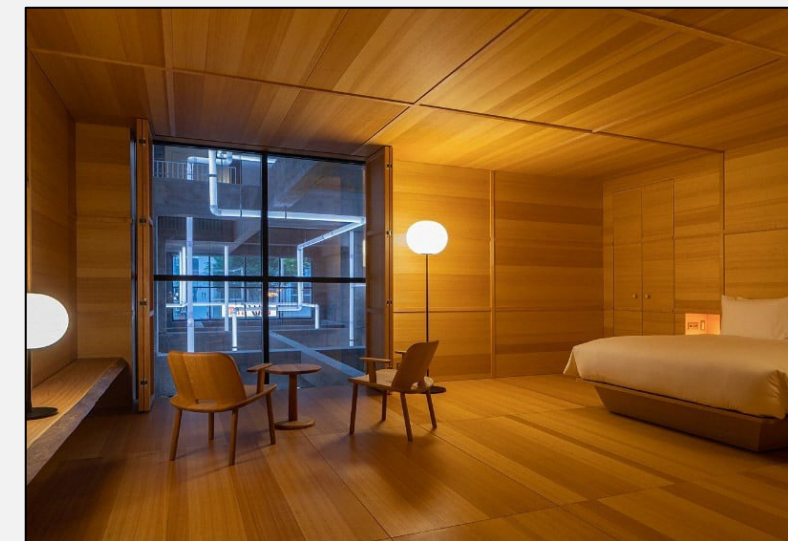
市内に拠点のある企業および個人が一体となって、民間視点で前橋市が今後100年先の未来に向けて進むべき道を考え、前橋市の新たな価値を創造することを目的とする。設立以来、前橋ビジョン「めぶく。」に立脚し、岡本太郎の作品「太陽の鐘」の誘致や、3億円を寄附した中心市街地・馬場川通りの遊歩道整備など、前橋の発展にエネルギーを注いできた。紺綬褒章2回受賞、2024年一般社団法人化。会員の年間拠出金50万円。

2018年 太陽の鐘誘致



「日通伊豆富士見ランド」に1999年まで設置されていたが、市が寄贈を受けたのち、市民間団体「太陽の会」による修復を経て移設。広瀬川河畔緑地に市民の新たな活動のシンボルとして再生した。

2020年 白井屋ホテル開業



創業300年の歴史を誇る老舗旅館を再生したアートホテル。大阪・関西万博の「大屋根リング」手がけた藤本壮介さんが設計し、25部屋ある客室は、世界的クリエイターによりすべて異なるデザインとなっている。

2021年 馬場川通りプロジェクト



©2024 mebuku

市道を民間資金・民間事業としてリニューアルすることや、まちづくり分野へのSIBファンドの仕組みを導入するプロジェクトとして全国的にも注目を浴びた。2022年に竣工。

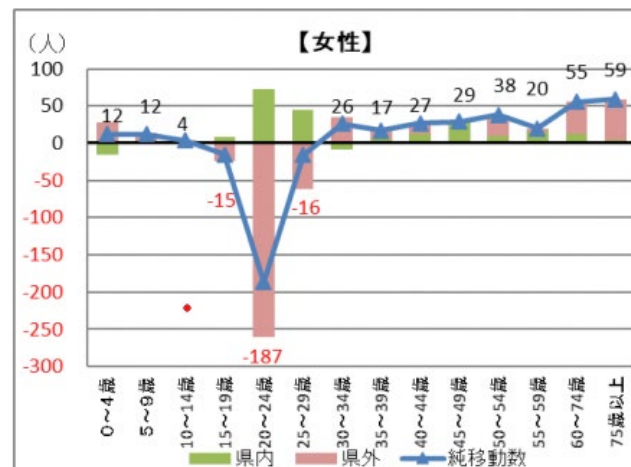
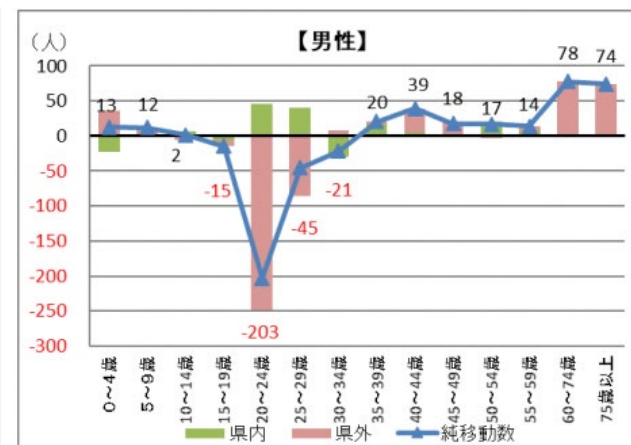
現状 | 建築×アートのまちへ「めぶく。」“まちなか” 4



課題 | 直面する課題に“まちなか”から解決策をさぐる 5

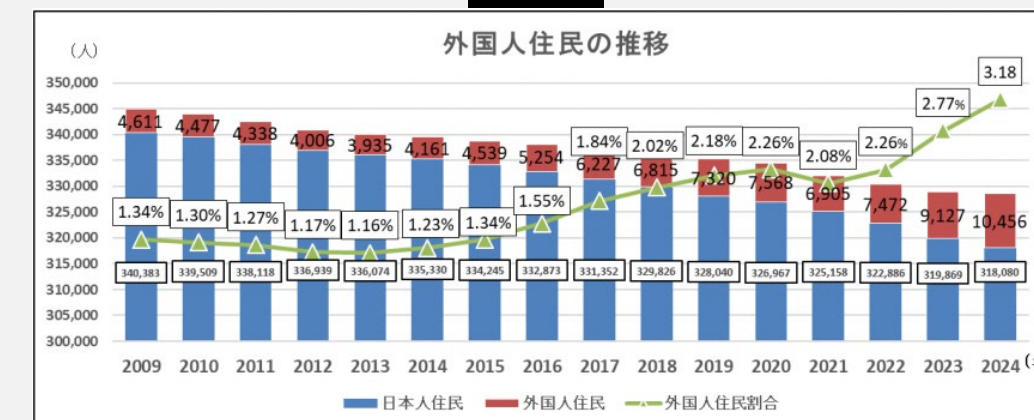
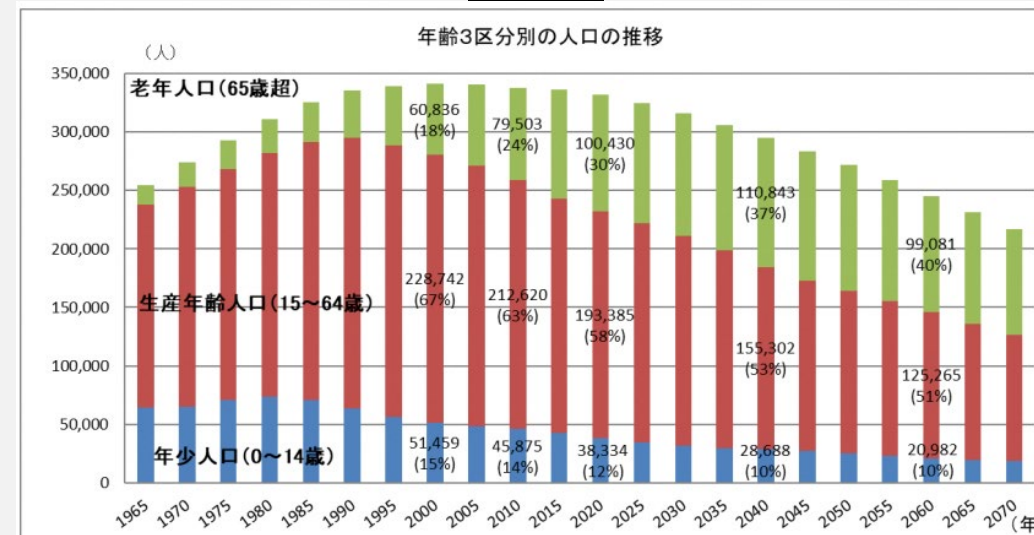
少子化と若年層の流出

年齢階級別純移動数及び転入転出者数



戻れるまち
戻ってきたいまちに

高齢者・外国人の増加



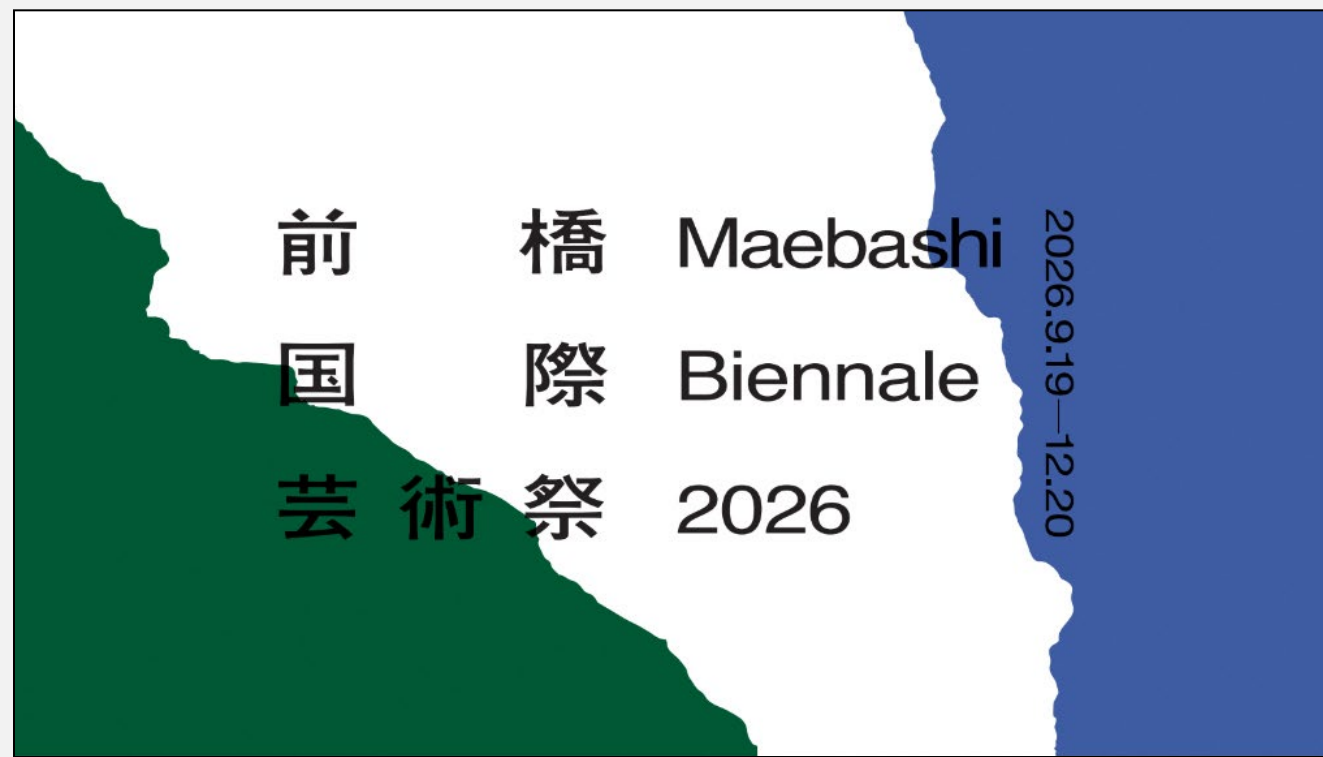
多様な人材が
活躍できるまちに

休日イベント時のみ 集まる人



平日でも誰かに
出会えるまちに

事業 | 「めぶく。」から10年 まちにさらなる進化を 6



名称：前橋国際芸術祭2026

開催テーマ：「めぶく。Where good things grow.」

会期：2026年9月19日〔土〕— 12月20日〔日〕（80日間）**隔年開催**

主な会場：アーツ前橋、まえばしギャラリー、白井屋ホテル
前橋文学館、前橋市中心市街地エリア

主催：前橋国際芸術祭実行委員会（実行委員長：小川 晶（前橋市長））



アートがめぶく、建築の聖地へ。

生まれ変わる前橋のエネルギーを体感する芸術祭

9年前に策定されたまちづくりビジョン「めぶく。Where good things grow.」をコンセプトに、官民が一体となった再開発が進む前橋。特に、元商業施設をコンバージョンした市立美術館（アーツ前橋）、元旅館を大胆にリノベーションしたアートホテル（白井屋ホテル）、かつて映画館があった敷地に国内屈指の商業ギャラリーを集めた（まえばしギャラリー）など、**街の記憶を引き継いだ先鋭的デザインの建築と現代アートの融合が世界から注目**されています。

今後も藤本壮介さんらスターアーキテクトによる建築プロジェクトが続々と計画されている再開発エリアには、**地元クリエイターが運営するアトスペース**や、週末ごとにブックフェスなどの**イベント会場に変貌する全長約330メートルの全蓋式アーケード**、**近代製糸による街の繁栄を今に伝える赤レンガ倉庫群**など、魅力的なスポットがたくさんあります。前橋国際芸術祭はこうした**地域の文化資源を継承しながら、未来に向けて変化し続ける前橋市中心市街地を舞台に、ウォーカブルなアート×都市体験を創造**していきます。（報道発表資料より）



成果 | 多様な市民がアートを発信する機会を創出

7

第1回前橋国際芸術祭の〈国際〉は世界水準の現代アートを地方が享受するショーケースをつくることではなく、赤城山や広瀬川に抱かれた暮らしの原風景や、近代製糸や前橋空襲にまつわる先人たちの苦難の物語を掘り起こし、グローバルなアートの文脈で翻訳・発信するところからはじめる。（報道発表資料より）

PickUp1 芸術祭は最高の教材。地域の担い手を育成

芸術祭の開催にあわせて地域の未来をみんなでつくる芸術学校「ニューローカルスクール」を開校します。前橋国際芸術祭2026参加アーティストによる活動報告や、前橋工科大学や東京藝術大学と連携する〈地域とアート/デザイン/建築〉の連続レクチャー、中高生・児童・親子を対象とするワークショップやまち歩きツアーなどを実施し、ビエンナーレ形式で開催する前橋国際芸術祭の2年周期にあわせて、前橋の未来をつくるクリエイティブ人材の育成プログラムを設計・実装します。（報道発表資料より）



参考:「めぶくフェス」の100人テーブル/2017
Photo by Shinya Kigure

PickUp2 ヘラルボニーと考える、国際芸術祭の新視点

障害のイメージ変容と福祉を起点に新たな文化の創出を目指すクリエイティブカンパニー・ヘラルボニーの松田文登さんが前橋国際芸術祭のアドバイザーに就任。障害とアート、福祉とビジネス、周縁と中央などをテーマに飛躍を続けるヘラルボニーの参加は、従来の芸術祭モデルに新たな視点をもたらすはずです。また同社は全体への関与だけでなく「HERALBONY Art Prize 2024」審査員特別賞を受賞した視覚障害を持つアーティストS. Proskiさんのプロジェクトもキュレーションします。（報道発表資料より）



松田文登



S. Proski

前橋市はまちづくりのお手本として全国の自治体から脚光を浴びています。
ご寄附をいただくことで、まちづくりの第一線に立つ企業として注目されます。

国際芸術祭2026のパンフレット等に協賛企業として掲載させていただく予定です。

参画アーティストの目に触れることで、今後のコラボ等の可能性が生まれます。

こちらの2次元コード



から寄附説明のページがご覧になれます。

ご清聴ありがとうございました。
前橋市ブースでお待ちしています。